

<特集 日本研究の道しるべ : 必読の一〇〇冊>はじめに

著者	榎本 渉
雑誌名	日本研究
巻	57
ページ	9-10
発行年	2018-03-30
URL	http://doi.org/10.15055/00006913

特集

日本研究の道しるべ

— 必読の一〇〇冊 —

はじめに

榎本 渉

今、人文科学を含めた学問の諸分野で、閉塞状況を打破する処方箋の一つとして、「学際化」の必要性が声高に唱えられている。分野の垣根を越えた研究が時には有効な場合も、たしかにあるだろう。とはいえ既存の専門分野に固有の分析手法を個人で複数習得して学際的研究を試みるのは、容易なことではない。それを乗り越える方法として、たとえば多様な能力を持つ研究者が集まり情報を出し合う共同研究などがある。その場合主催者には高度に専門的な知識だけではなく、各専門分野でどのような研究が行なわれているのかという情報も求められるだろう。また学際的研究とまでは行かなくても、自分の専門分野では想定もされていなかった興味深い問題の設定の仕方を、他分野の研究で見出すこともできるかもしれない。いずれにしても研究者にとってアンテナは、多いに越したことはない。

しかし各専門分野の内ですら、目下生み出されている研究に網羅的に目を通すことは困難である。成果主義の定着によつて、シンポジウムや報告書・論文集など、発表媒体の過多と業績の濫造が恒常化したことも、それに拍車をかけている。このような現状で必要なものは各分野においてどのようなことがこれまで問題にされてきたのか、または現在問題にされているのかを概観するための手引きである。これまでも各専門分野では詳細な手引書が数多く刊行されてきたが、多くはその分野の研究者に向けて作られたものであり、一定の知識がなければ十全に活用することは難しい。特に他分野の現状を知りたい者に向けた手引書の需要は、案外少なくないのではないかと思う。

本特集「日本研究の道しるべ——必読の一〇〇冊」は、このような現状を鑑みて企画された。その趣旨は、日本研究に関わる研究書や入門書などを、各分野の研究者に紹介してもらうというものである。取り上げる分野としては、「思想史」「美術」「宗教」「文化人類学」「文学（前近代）」「文学（近現代）」「考古学」「社会文化史」「政治史」「ジェンダー」「ポピュ

ラーカルチャー」「映画」「北海道／北方世界」「沖繩／南島」を設定した。他にも産業・伝統芸能・科学技術・海外移民など取り上げるべきものは多々あるが、誌面の都合上、一定の限定を設けざるを得なかった。

上掲の諸分野にしても、実際にはずいぶんと大雑把な分類になっている。たとえば「美術」なる分野の中には、絵画・彫刻・建築・工芸など、極めて専門性が高く、要求される知識も異なる研究対象が含まれている。これらを一つにまとめて依頼すること自体、専門家からすれば乱暴な所業であろう。「文学（前近代）」にしても、上代から近世の各時代について和文・漢文の世界、韻文・散文の世界があり、その内実は多様である。本特集ではこれらの概観を各一人の執筆者に担わせるという、相当無理な依頼を行なった。しかも本文中で紹介する文献は、一分野あたり五〜十冊としている（これを取まりきらない分は表にでもらった場合もある）。全原稿を併せておよそ百冊となるが、この冊数で各分野の研究動向のすべてを知ることとは到底不可能である。

だが実際のところ、一つの特集として読者が目を通すことのできる（通す意欲の湧く）規模となると、このくらいが適量かと思う。原稿に目を通していても、紹介文献をあえて限定したことによって、一つ一つを解説する文章の密度はかなり濃いものとなっている。冊数の上では「たった百冊」かもしれないが、多くの方はこれを熟覧

しきつた後に、それなりの満腹感を味わうことができることと思う。つまり本特集の目指すところは、日本研究における動向の全方向的把握ではなく、その中で注目すべき一部の挙例であるということになるだろうか。もしも読者がその中で紹介されたあるトピックに関心を持ち、既刊の手引書や文献目録・検索エンジンなどを活用して、さらに詳細を調べてくれることがあるならば、本特集は未知の研究に触れるための入口を提供するという所期の目的を果たしたことになるだろう。

なお執筆者については、外部の意見も採り入れつつ、編集委員会で議論を行なって選定し依頼した。各分野の研究の最前線にありながら、その動向を広く見渡すことができ、それを専門外の者にもアピールできる研究者を選んだつもりである。こうして集まった諸原稿の執筆方針は、担当分野全体を俯瞰した書籍を中心に紹介したものの、関連研究を手広く紹介してその広がりを示したもの、あえて特定の時代・テーマを重点的に取り上げたものなど様々であるが、いずれにしても無味乾燥な研究史整理とは異なるものとなっているはずである。読者におかれては、新たな成果が生成される現場にいる研究者たちが、今どのような研究を面白いと感じ、重要と思っているのかも読み取って欲しい。